

復刊

所沢図書館だより  
復刊10号(通巻88号)  
題字 高橋 玄洋 氏

# いざみ



目次	
P.1-3	子どもと本をつなぐ講座 ～子どもと楽しむ 絵本とおはなし～
P.4-5	トベアの分館めぐり
P.6	子ども読書の日

## 子どもと本をつなぐ講座

—子どもと楽しむ絵本とおはなし—

平成27年5月24日(日) 会場：所沢分館

現在、私は東京子ども図書館で働いています。以前は三鷹市の公立図書館に36年間おり、私が退職してからできた南部図書館を除いた三鷹市の公立図書館全館で勤務しました。

東京子ども図書館のような小さな私立図書館では公共図書館のサービスとは少し違った良さと制約があります。公共図書館のときにはなかなか感じることもできなかった一人ひとりの子どもに対する目配りだったり、名前と顔が一致して、この子の兄弟や家族関係が色々わかってきたりすると、次にこういう本を薦めてみたいというのがよく見えてきます。

東京子ども図書館では、3歳にならないと貸出カードが作れず、お話会にも入れません。そのため、3歳のお誕生日がその子にとってはものすごく待ち遠しい日になります。3歳を迎えた初めてのお話会の日には、お

話会のメンバーズカードを職員からもらいます。今は、親やおじいちゃん、おばあちゃんが先回りして何でもかんでも与えてしまうので、我慢して待つというところが苦手な子が多いようです。うちの図書館では、泣こうが叫ぼうが、職員も心を鬼にして待たせませす。待って、待って、やっと手に入れた資格とこれから味わえる権利をもらえた喜びは、かけがえのないものだと思っています。

東京子ども図書館が、子どもたちを本の世界に誘うためにまづやっていることは「わらべうた」です。声を発している人の温もりやスキップの中で、ことばのシャワーを浴びるといふことをとても大事にしています。ことばの力を養うには、絵本より、わらべうたで肉声の声を聞くことがとても大切です。



私が図書館員になったばかりの頃は、絵本は子どものためのものでした。しかし、70年代に入って日本の絵本という文化が飛躍的に発達し、描き手も増えて、絵本に対する認識が変化しました。80年代から90年代になると、絵本を愛好するのは子どもだけじゃないという考えが増えていきました。ノンフィクション作家の柳田邦男さんは、「子ども時代・子育て・人生の終末：、人間は人生の中で何度も絵本に出会い、共鳴する」という「命と絵本の繋がり」についての講演を全国でされています。絵本の喜びや素晴らしさを受容する人たちがとても増えているのだと思います。

東京子ども図書館の児童室に置いてある本は、どんなに有名な絵描きさんが描いた本であつ



講師  
小関知子 さん

でも、子どもに手渡ししていくときに、ふさわしいかどうか、一冊、一冊、かなり厳密に選んでいます。

3年前に基本蔵書目録として『絵本の庭へ』を作りました。これは〈本当に子どもに出会ってほしい本〉を掲載した本です。ただし、全世代が全員支持するかというそれはまた別の問題で、リストに入ってなかったからといって、ランクが落ちるということではありません。「何でこの本が入っていないの？」という声が多くありましたが、良くないから落としたというよりは、ここに選んだ本を、まず手に取ってほしいということなので、リストにご自身でプラスしていっただければいいと思います。

『今、この本を子どもの手へ』は、この春に出たばかりの本です。ここでは絵本以外にもノンフィクションや物語など、現在購入できる本を紹介しています。ちなみに『絵本の庭へ』では、消え去るには惜しい、図書館ではポロポロでも除籍せず残しておいて欲しいという意味も込め

て、あえて絶版のものも紹介しています。

なぜ『今、この本を子どもの手へ』が生まれたのかというと、2011年3月11日の震災後、同年6月から東京子ども図書館は陸前高田市の小友小学校に支援に入りました。阪神大震災のときにも、図書館へ全国から多くの本が届いたそうです。しかし中には、古本の処分では？というものや、子どもには人気があってもきちんと選書されておらず、全体の蔵書構成としてどうだろう？という本ばかりが集まってしまった苦い経験があったそうです。この話を聞いていたので、今回私たちが送るときには、新品の本で、なおかつ絵本・フィクション・ノンフィクション・実用書を混ぜたものを送ることにしました。私立の図書館ですからお金が十分にあるわけではないので、出版社に寄贈を募ると快く協力してくれました。「割引するので買ってほしい」という出版社からは、図書館の支援金から購入しました。そして百冊を10回、合計千冊分を無事送ることができました。

この千冊をまとめたのがこの『今、この本を子どもの手へ』です。

東京子ども図書館は、わらべうた、絵本の読み聞かせ、お話（ストーリーテリング）など、子どもと本とを結び付けることを日々やっています。設立40周年の節目の年であった昨年、これまでの活動が認められ、第49回東燃ゼネラル児童文化賞という賞をいただきました。その受賞記念公演を千代田区の紀尾井ホールという大きな舞台で行ったときには、楽器も何も使わず人間の生の声だけでどれだけ人の心に響くか、どんな世界が作り上げられるのかを実践しました。まずはわらべうたを職員5人くらいで並んでやり、それから絵本の読み聞かせでは、絵本のさわりの部分だけを5冊読みました。そのとき読んだのが『ももたろう』『もりのなか』『ぐりとぐら』『三びきのやぎのらがらどん』『ひとまねごさる』です。そして最後に松岡享子さんが『三びきのクマの話』を語りました。

その中の一冊『三びきのやぎのらがらどん』は、北欧民話としてアメリカで1957年に発行されました。この絵本は、

日本で本当によく版を重ねられていてアメリカより日本の読者が多いくらいです。作者のマーシャ・ブラウンも日本での評価に大変喜んだそうです。出版50周年を迎えた頃に、記念に特装版（布製の表紙をつけるなど高価な装丁のもの）を作ろうという提案がありました。しかし、マーシャはそれを断り、代わりにそのお金で子どもでも手に取れる安価なものを作り、また版を重ねることにくすんでしまった表紙の青色を元に戻してほしいとおっしゃったそうです。その経緯を知った福音館書店が、新たに版を変えて出版しました。新版は副題が〈ノルウェーの昔話〉になり、表紙は、マーシャの指示通りの青色に変わりました。ページをめくっていくと〈アン・キャロル・ムーアとトロルに捧げる〉と書いてあります。アン・キャロル・ムーアをご存知ですか？『図書館に児童室ができた日』の主人公です。この

人は、19世紀の生まれで、児童図書館員の草分けとも言える人です。マーシャは、絵本作家としての地位を築く以前は、図書館員として働いていました。その時に、アン・キャロル・ムーアと出会ったそうです。私もまだ若手だった頃、小河内芳子さんや他の大先輩のことをアン・キャロル・ムーアのように見ていたのを思い出します。



『ひとまねこざる』は岩波書店で何冊か出たあと『おさるのジョージ』シリーズとして出版されています。子どもたちは続きだと思って手に取りますが、H・A・レイの原画とは随分変わったと思いますし、東京子ども図書館ではそこはこだわりたいたい『おさるのジョージ』は入れていません。

うちの図書館に初めて来て、「ここは本が少ないから自分が読みたい本がすぐ見つかる」と言ってくれた子がいました。選書は「あれもこれもいい」「一

冊くらいなら」と選んでいくと子どもに手渡ししたい本がかすんでしまいます。私たちは選書をするときに、なぜ選ばなかったのかを全て理由を書いておき、どうして入れていないのかと聞かれたときに、理由を答えられるようにしています。

絵本というのは絵を見て言葉を聞きながら物語を楽しむものですが、お話(ストーリーテリング)は言葉だけが頼りで他に何もありません。お話の講習会の受講生にまず話すのは、言葉をレンガに例えて家を作るように、一つ一つ積んでいくことによつて物語ができる。だから言葉と言葉の繋がりがグラグラしていたり、ふさわしくない異質なものが入っていたりすると聞き手は頭の中で物語を完成させることが難しくなります。ストーリーテリングというのは、「想像」と「創造」をもとに高める力を付けるのに役立ちます。子どもは、お話を耳から聞いて、面白かったと思うと、もう一度聞きたいと言って自らその本を借り

てくれたり、活字に抵抗がある子ども、お話で聞くことにより、長くて込み入った話でも読めてしまったりします。また、昔話は順を追って時系列で話が進むので、子どもにも無理なく話が入ってくるのでおすすめです。

小学3年生くらいになると、物語を楽しむ力と、活字を読み解く力が一致すると言われていきます。それまでにお話を楽しんでいた子は、そこから一気に自分で読むという方向に進みます。反対に本に対して抵抗がある子は、3年生を機に本から離れてしまいます。活字を読むということは、目で見て字を拾うわけですが、人に語ってもらったと即座に頭に入ってくるので、自分でたどどしく読むよりも物語の身に集中できます。ストーリーテリングを大切にしてるのは、そういうことなのです。

※紙面の都合上、講演内容を抜粋・要約させていただきました。

#### 《参考文献》

『絵本の庭へ』(東京子ども図書館編・出版) 『今、この本を子

どもの手に』(東京子ども図書館編・出版) 『ももたろう』(松居直文 赤羽末吉画 福音館書店) 『もりのなか』(マリー・ホール・エッツ文・絵 まさきるりこ訳 福音館書店) 『ぐりとぐら』(中川李枝子作 大村百合子絵 福音館書店) 『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン絵 せたていじ訳 福音館書店) 『ひとまねこざる』(H・A・レイ文と絵 岩波書店) 『イギリスとアイルランドの昔話』(石井桃子編・訳 J・D・バトン画 福音館書店) 『図書館に児童室ができた日』(ジャン・ピンボロー作 デビー・アトウェル絵 張替恵子訳 徳間書店)

#### 《講師紹介》

小関知子(こせきともこ) 東京都港区生まれ。東京都教育委員会を経て三鷹市役所に入庁。三鷹市立図書館に勤務。2008年三鷹市立西部図書館長を最後に定年退職。児童図書館サービスをライフワークとする。

現在、公益財団法人 東京子ども図書館理事。

# トベアの分館めぐり 最終回

## 所沢分館

### 所沢分館【基本情報】

〒359-1121 所沢市元町 27-1  
 TEL04 (2923) 1243 FAX04 (2928) 8195  
 西武新宿線航空公園駅より徒歩 13分  
 西武新宿線所沢駅より徒歩 15分

ぼくは図書館のマスコット「トベア」。  
 分館めぐり最終回は、所沢分館を  
 訪問します♪



「飲食コーナー」で  
 ちょっとひと休み～。

分館長さん、こんにちは！  
 今日は案内よろしく  
 お願いします！



所沢分館 1階  
 ところざわぶんかん 1かい

階段 頑張っ  
 のぼるぞ～。



新聞・雑誌  
 コーナー

「対面朗読室」では、  
 目の不自由な方に  
 対面朗読サービス  
 を行っているよ。

対面朗読室



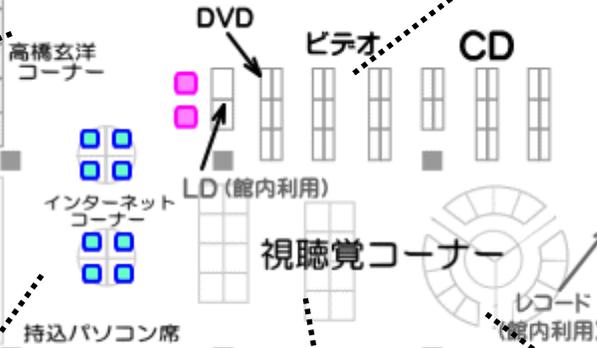
エントランス  
 ホール

カウンター



多目的会議室

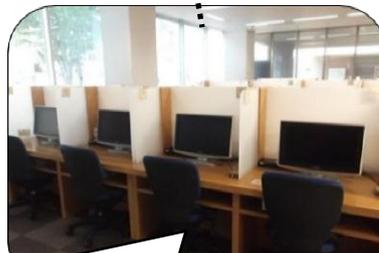
高橋玄洋先生  
 のコーナーだ！  
 ドラマのDVDも  
 借りられるんだあ。



「多目的会議室」では映画会  
 やイベントを行っているんだ。  
 これは落語の高座だね！



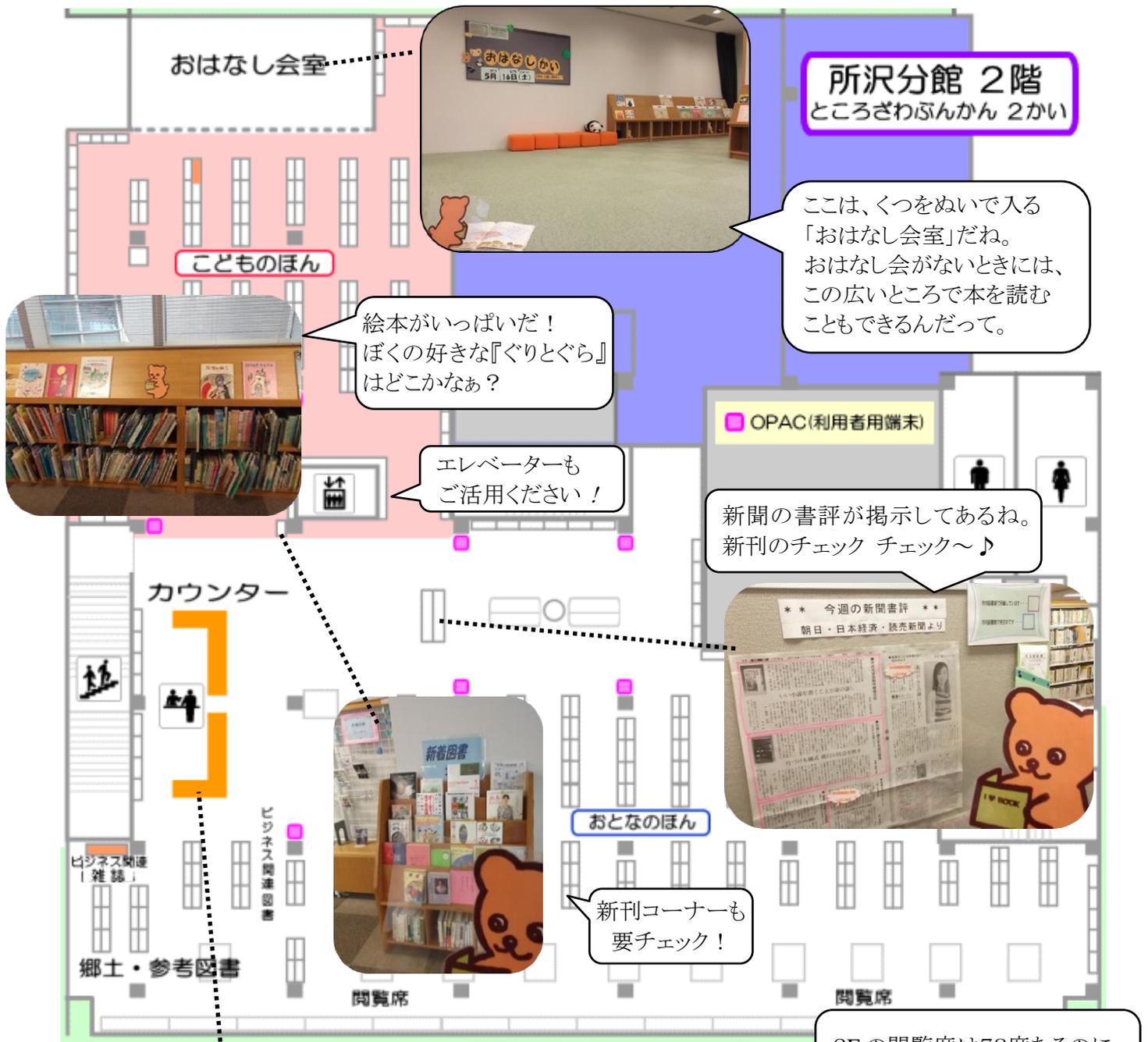
インターネットができる端末が8台、  
 持込パソコン席が14席、あるんだよ～。



映像と音楽の視聴ができる席。



グループ席もあるよ！



**所沢分館 2階**  
ところざわぶんかん 2かい

ここは、くつをぬいで入る「おはなし会室」だね。おはなし会がないときには、この広いところで本を読むこともできるんだって。



絵本がいっぱいだ！  
ぼくの好きな『ぐりとぐら』はどこかなあ？

エレベーターも  
ご活用ください！

新聞の書評が掲示してあるね。  
新刊のチェック チェック〜♪



新刊コーナーも  
要チェック！

2Fの閲覧席は78席あるのに満席になるときもあるんだって。



レファレンスカウンターで質問しちゃお。すみませーん！  
絵本はどこにありますかー？



- 所沢分館の定例行事**
- 毎月第2・3日曜日  
こども映画会 10:30～  
市民映画会 14:00～
  - 毎月第1・3土曜日  
おはなし会 10:30～
  - 毎月第4金曜日  
親子おはなし会 10:30～

おさがしの資料がありましたら、  
お気軽にお声かけください。  
ご来館お待ちしております！



所沢分館のみなさん  
今日はありがとう  
ございました！



# 子ども読書の日



平成13年12月「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布・施行され、4月23日が「子ども読書の日」として制定されてから久しくなります。この法律は、「子どもの読書活動についての関心と理解を深め、子どもが積極的に読書活動を行う意識を高めよう」という趣旨のものです。

この法律を基に国および地方公共団体は「子ども読書の日」の趣旨にふさわしい事業を実施するようになりました。所沢市でも「子ども読書の日」関連行事を開催しています。

平成14年に初めて迎えた「子ども読書の日」の行事のなかで、現在も図書館のマスケットとして活躍している「トベア」の名前を募集し、当時、椿峰小学校の3年生の女の子が名付け親となりました。今年も「子ども読書の日」の前後に、市内全館で関連行事を開催しました。本館では、ボランティア

アによる「おはなし会」、「工作会」、分館では「スペシャルおはなし会」や「読書スタンプリナー」など、たくさん子どもたちが参加してくれました。

またこの法律が制定・施行されたことにより、平成21年には「所沢市子どもの読書活動推進計画」が策定されました。その計画期間終了にともない、五年間の取り組みの成果と課題を踏まえて、平成26年3月に「第2次所沢市子どもの読書活動推進計画」を策定しました。

この計画は、「所沢市のすべての子どもが、あらゆる機会とあらゆる場所において、自主的に読書活動を行うことができるようになります」という基本理念を掲げ、それを実現するための取組を掲載したものです。所沢図書館のホームページにてご覧いただくこともできます。

## 原稿募集のお知らせ

左記のテーマで、原稿を募集しています。(二人一テーマ)

- ① 私が好きな本
  - ② 私が好きな作家
  - ③ 私と読書
  - ④ 私と図書館
  - ⑤ 私の図書館活用法
- ▼字数 500字程度 ▼住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記のこと  
▼原稿はお返ししません ▼文章は添削することがあります  
▼送り先 〒359-0042  
所沢市並木1-13  
所沢図書館「いずみ」担当

## 編集後記

- ◆今さらですが、子どもの頃もつと本を読んでおけば……。 (S)
- ◆暑い暑いと言っていた夏も過ぎてみればあつという間です。 (M)
- ◆早くすずしくなるといいな。 (T)
- ◆こおろぎのやさしくすき通る声を耳にしました。
- 秋はもうそこに……。 (K)
- ◆もうすぐ〇〇の秋がやってくる。 (I)
- 〇〇にはお好みで!!

編集発行：所沢市立所沢図書館 〒359-0042 所沢市並木1-13

ホームページアドレス

パソコン

<https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp>

携帯電話

<https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp/k>

電話 / FAX

本館 04-2995-6311 / 04-2992-1421  
所沢分館 04-2923-1243 / 04-2928-8195  
椿峰分館 04-2924-8041 / 04-2928-8148  
狭山ヶ丘分館 04-2949-1193 / 04-2949-8577  
松井小学校図書館 04-2992-2796 / 04-2992-2797

富岡分館 04-2943-3636 / 04-2943-6680  
吾妻分館 04-2924-0249 / 04-2928-8250  
柳瀬分館 04-2944-4023 / 04-2945-7236  
新所沢分館 04-2929-1905 / 04-2929-1906

2015年9月5日発行 復刊いずみ10号 (通巻88号)